The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教的利他主義
Author(s)	稲場, 圭信
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 13-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51795
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教的利他主義

稲場 圭信
大阪大学大学院人間科学研究科准教授

要旨

東日本大震災。未曾有の大災害に、人々が共通の問題解決のために立ち上がり、新たな連帯が生まれている。つながりがそぎ落とされてきた社会にあって、大きな変化が生まれた。原発に対する安全神話が崩れ、科学技術に対する現代人の見方・関わり方も根本から問い直されている。

今の日本社会、他者を助ける行為、利他的行為を自己犠牲とは感じない人々がいる。お互い様、そのような相互関係の心、連帯感が生まれている。宗教は、長い歴史において、様々な苦難に寄り添ってきた。まさに、今、宗教者の生き方が問われている。

諸宗教が、利他主義、他者への思いやりと実践に関する教えを持っている。そして、畏敬の念、神仏のご加護で生かされているという感謝の念が、人を謙虚にし、自分の命と同様に他者の命も尊重させる可能性がある。おかげ様や恩返しといった感謝が思いやりという行為の動機ともなる。

本稿では、宗教と利他主義、社会関係資本を概説的に扱う。市民社会における宗教とソーシャル・キャピタルの関係を検討して、今後の研究の土台を提示したい。

目次

はじめに
1. 新たなきざし
2. 利他主義
3. なぜ利他主義研究なのか
4. 宗教的利他主義
5. 宗教的利他主義の構造
6. ソーシャル・キャピタルとしての宗教
おわりに

キーワード

宗教的利他主義
ソーシャル・キャピタル
思いやり格差

はじめに

2011年3月11日、東日本を襲った巨大地震、そして続く大津波により多くの命が犠牲となった。未曾有の大災害、甚大な被害の前に、誰もが自然の猛威と人間の無力さを感じた。何かお役に立てないか、ほっとけない、居ても立っても居られないと救援活動に動き出した人たちがいた。その中に宗教者もいた。そして、被災地では100を超す寺社教会等の宗教施設が緊急避難所や救援活動の場になった。

宗教的利他主義と社会貢献を20年近く研究してきた者として、また、阪神・淡路大震災で避難所でのボランティア活動をした経験者としても、遠く離れた地から何かできないかと筆者は呻吟した。大地震から2日後の3月13日に宗教者災害救援ネットワークを数人の研究者に呼びかけて立ち上げ、宗教者災害支援連絡会の設立にも関わり、世話人の一人として活動を続けている。また、被災地に入り、宗教者に対して聞き取り調査を実施し、宗教者や現地の方々と交流したりしている。

宗教者・宗教団体の継続的な支援活動には敬服するばかりだ。一方で、オウム真理教の地下鉄サリン事件を経て、調査対象である宗教との距離の取り方・関わり方が問われてきた。調査対象に共感する姿勢と、調査対象の活動を調査・分析する研究者の姿勢の違いについて自覚的であることは、言わずもがなである。しかし、今回の被災地における宗教者の支援活動の調査においての研究者の関わり方としては、自覚的な踏み込みが必要であろう。そのこと無しに、客観的姿勢とディタッチメントを強調した調査は、調査地被害（宮本 1972）を生むだけである。客観性を金科玉条のように持ち出す研究者は、被災地の人たちには迷惑な存在である。

本稿では、筆者のこれまでの宗教的利他主義の研究を概説的に紹介しながら、そこに関わる研究者のポジショニングについても言及したい。

1. 新たなきざし

日本社会は急激に変化している。2010年1月にNHKが「無縁社会」という特集番組を放映した。社会の中で人と人とのつながりが無く、人知れず死んでゆく孤独死も自殺者同様に年間3万人を超え社会問題化した。地縁、社縁、血縁という「絆」「つながり」が弱まり、孤独を生きる社会となっている。

写真1　気仙沼の寺院で支援活動する僧侶（筆者撮影）

無縁社会の孤独な生は、他者をかえりみない生と重ね合わせだ。まさに、新自由主義や自己責任が喧伝される現代社会は、自分さえよければよいという利己主義の風潮が強い社会「だった」。……と過去形で書いているのは、今、日本社会が根本的に変わるという直感と願いでもある。

内閣府の「社会意識に関する世論調査」で2010年、現在の世相を「自分本位である」とみる日本人の割合が38.9％に対して、「思いやりがある」とみる人は12.4％だった。しかし、東日本大震災を機にこの数字は大きく変わると私はみていた。事実、2014年1月の同じ調査では、「自分本位である」とみる日本人の割合が36.5％に対して、「思いやりがある」とみる人は20.3％だった。未曾有の大災害を前に、人々の中に眠っていた思いやり、お互いさまの感覚、共感する心が再生したのではないか。

近年、さまざまな学問分野で利他性に関する研究が盛んである。2009年、アメリカ社会学会に、「利他主義・道徳性・社会的連帯」という専門部会ができた。宗教的利他主義に関しても、信仰を基盤とした社会奉仕活動の動きが研究対象ともなっている。

利他とは、読んで字のごとく、自己の利益ではなく他者の利益になる行為である。今の世の中、企業や大学など社会の組織体に対しては、社会の一員とし

て世の中への「思いやり」が社会貢献として問われている。そのような現代社会にあって、宗教は利他性を発達させうるのか否か、宗教的利他主義、社会貢献とは何なのか、そして、その可能性、これらを問うことは重要な社会的テーマである。

高度情報化社会に生きる私たちは、世界中の出来事を様々なメディアで見聞する。しかし、政治や経済の巨大なシステムの中で、世界の未来を危惧し、社会に対する問題意識を持ったとしても、自分個人では何もできないという無力感を噛みしめている。無力感は、それでも自分は大丈夫という全能感と無関心にいつしか変貌する。しかし、それでは現代社会が抱える数々の深刻な問題を解決することはできない。国や大きな組織に任せておけばすむという時代は終わった。政治・経済と国家・組織の強大なシステムによるダイナミズムは、個人・市民へ移行しつつある。

今、東日本大震災の被災地では心のケアの重要性が増している。地域のつながりを奪われ、家族を亡くし、様々な縁を失った人たちが、これから生きていく、それを多方面でサポートする。大切なことは、相手に寄り添うということだろう。そのことが心のケアにつながる。ここで問われているのは、苦に対する感受性、共感する力ではなかろうか。宗教は、長い歴史において様々な苦に寄り添ってきた。経済・効率とは別の価値観、世直しの思想を持つ宗教が、経済や政治のあり方を問い、社会的力を発揮することができるのか。宗教者が、世の中の苦と諸問題に向き合い、実践・行動しているのか。これらのことを論じる前に、まず利他主義についてみておこう。

2. 利他主義

利他主義とは、英語では、アルトルイズム（altruism）と言う。19世紀のフランスの社会学者、オギュースト・コントによる造語である。心理学では「愛他主義」という言葉を用いることがあるが、同じ意味である。動物行動学や遺伝子研究などの分野でも「利他主義」の語が使用されている。コントが、エゴイズム（egoism 利己主義）に対置させてアルトルイズムという語を定義したことからも、日本語では、「利己」に対して「利他」、利他主義の方が愛他主義よりも用語としては適切であろう。

利他主義という語は学問的に使われて久しいが、日常的には使わない。その意味するところは、自己の利益のためではなく他者のために心遣いをする態度である。端的に言えば、他者への「思いやり」だ。

便宜上、ここでは利他主義を利他的行為として、「社会通念に照らして、困っている状況にあると判断される他者を援助する行為で、自分の利益をおもな目的としない」と定義しておこう。それほど深刻ではない状況であっても、相手のことを思いやり、手を差し伸べる行為も利他的行為とする。上記の定義では、「自分の利益をおもな目的としない」と補足的な説明をつけているが、これには理由がある。それは、多くの人が考える疑問と関係している。他者を援助する行為であっても、実は他者のためではなく、自己満足のため、自尊心のため、自分だけが幸せであるという罪悪感から逃れるため、あるいは、周りから賞賛を得たいためなど表面には出てこない功利的な動機が潜んでいるのではないか、という疑問である。しかし、これでは内的な要因を含まない純粋な利他主義が存在するのか否かという終わりなき議論になってしまう。そこで、内的な要因は定義から除外し、現実生活に存在する行いに対して定義を与え、研究の対象として取り上げているのだ。

利他主義という言葉は、一般的にはあまりなじみのない言葉である。しかし、利他主義に関係する人間の心と行いについては、人類の歴史において古くから論じられてきた。そこには大きく分けて三つの見解が存在する。人間性悪説、

写真2　大船渡の仮設住宅を訪問支援する宗教者
（筆者撮影）

人間性善説、そのどちらでもないとする三つである。

人間性悪説はマキャベリやホッブズなどの社会思想の出発点となっている。人間は生まれながらにして自己中心的で、ルールがなければ自己の利益のために悪さをもするという考え方である。反対に孟子に代表される人間性善説は、人間は本来的には善なるものであるという考え方だ。そして、第3の考え方は、環境によって人間は善人にもなれば、悪人にもなるというものである。20世紀末からの研究は、利他主義は社会生活によって学ぶことができるという第3の考え方をベースにした研究結果を数多く提示している。後述するように、とりわけ宗教は利他主義と深いかかわりがある。

利他主義における実証主義的研究、特に心理学的アプローチでは、「なぜ、人は他のために自らの命を投げ出したり、手を差し伸べたりするのか、いかなる状況下で人はより利他的になるのか」というような研究が主であった。そして困難な状況にある人への共感や感情移入が利他的行為の動機であるという仮説に関する論文が多数存在する。また他人や敵対者に対してよりも親戚や友人に対してより共感を覚えるということがさまざまな研究によって確証されている。一方で、社会的規範への志向性が利他的行為の源泉となることも指摘されている。しかし、このような仮説が、近い関係にある人に対しては共感が、そうでない場合には社会的規範への志向性が利他的行為の動機であるというような単純な二分化をしているわけではない。ナチスによるユダヤ人虐殺に際し、危険を冒して救済活動をした人たちが共感にもとづいていたり、親戚への腎臓提供を道徳的義務によって行ったりするケースも存在するからである。

3. なぜ利他主義研究なのか

第2次世界大戦後、社会科学の分野では、人はどうして残虐な行為をするのか、人類はなぜ戦争をするのか、といった人間の負の部分に関する研究が盛んであった。それは、多くの人の犠牲という厳しい現実を前に、そのような悲惨なことを二度と繰り返してはならない、そして、そのためには原因を解明する研究が必要だという信念があったからである。

一方、20世紀半ば、ハーバード大学の社会学者であったソローキンは、人間の負の部分ばかりを見るのではなく、人間の善なる面、つまり、他者への思いやり、利他主義を研究するべきだという信念から「利他主義研究センター」を設立し、研究を進めた。ソローキン（1977）は、「いかにして、人は利他的になるのか」に焦点を合わせて、アメリカにおけるよき隣人とカトリックの聖者たちが示す利他性に関して研究を行った。

写真3　ペンシルバニアの教会でホームレスへの給食支援をするボランティア（筆者撮影）

そして近年、アメリカでは、ジョン・テンプルトン財団が利他性の研究に数億円を助成するなど、利他性をめぐって盛り上がりをみせている。宗教と利他性に関する英語の著作も多い（Habito and Inaba 2006）。なぜ、今、利他性に関する研究が盛んなのだろうか。

現代社会は、新自由主義、自己責任の方向に大きく舵が取られ、自分さえよければよいという利己主義の風潮が強い社会と言える。社会の分断化、人間関係の希薄化、事実を偽って自己の利益のみを考える社会の風潮を、筆者は、「思いやり格差」として論じている（稲場 2008）。「思いやり格差」とは、端的に言って、人々の思いやりの度合いに格差が生じていることを意味する。近年の経済不況に応答して、ホームレス支援をする人びとも増えている。その一方で、ホームレス襲撃事件が後を絶たない。まさに「思いやり格差」社会の象徴だ。他者を顧みない、思いやりの欠落した生き方は、子どもたちにも影響を与えずにはおかない。例えば、小学生の示す思いやり度は、1970代から80年代にかけて急激に低下し、90年以降は低迷したままという調査結果もある（中里・松井 1997）。

現代社会は、環境問題、国際紛争、テロリズム、経済問題、医療問題、介護

福祉問題、年金問題、教育問題と、多くの難問を抱えている。従来のように行政主導のシステムに頼るのではない、自発的な利他性に富む市民社会が必要とされている。行き過ぎた利己主義に抗して、今こそ、共感、思いやり、利他性をもとにした社会を構築しなければならない。そのような社会的要請から、利他性に関する研究が進められているのだ。

4. 宗教的利他主義

歴史をひも解けば、日本における宗教者による弱者への慈善活動は長い歴史を持つ。身寄りのない貧窮の病人や孤老を収容する救護施設として聖徳太子や光明皇后が設けた悲田院や施薬院が慈悲にもとづく仏教実践として知られている。奈良時代の行基の公共事業も有名である。中世では、永観をはじめとする平安末期の浄土教の聖たちの慈善活動があった。カトリックの救貧活動もよく知られている。そこには宗教的理念にもとづいた利他主義「宗教的利他主義」が存在する（稲場 2011）。

「利他」という漢字は、元来、他者を利益すること、他人を救うことを意味する仏教用語からきているが、利他主義自体は仏教の専売特許ではなく、諸宗教で説かれる。利他主義に関連して、チャリティという言葉があるが、それはキリスト教に源流がある。チャリティ（charity）は日本語に訳せば「慈善」となるが、その語源であるラテン語のカリタス（caritas）はギリシャ語のアガペー（agape）の訳であり、キリスト教においては神の愛と隣人愛だ。特に、貧者への施しはイエスの説いた隣人愛の端的な実践であり、強盗に襲われて道端で弱っていた旅人に手をさしのべた「よいサマリア人」がモデルとされる（新約聖書「ルカの福音書」10章25 ～ 37節）。すなわち、慈善は、宗教的背景のもと、他者へあわれみを持ち、困窮者や不幸な人を救う善意の行い、善行を意味する。

キリスト教のみならず、ユダヤ教、イスラーム、仏教など多くの宗教において、慈善は尊い行い、あるいは信仰者としての義務として説かれている。慈善は、自己の財産を分け与える喜捨とも関連している。そこには相互扶助、利他主義の思想がある。ユダヤ教の正典に説かれる喜捨、すなわち他者への施しは神の義にかなう行為と見なされている。また、イスラームでも、喜捨が五つの信仰義務のうちの一つとして定められ、イスラーム諸国には、公共の福祉のために利用される慈善制度（ワクフ）がある。キリスト教やイスラームのような一神教の宗教の場合、宗教的利他主義は、善行を通して神の栄光に奉仕することを意味し、利他的行為の対象である他者との関係は神を通して理解される場合が多い。

キリスト教や仏教の利他主義、社会貢献活動が論じられる一方、神社神道は、個人的な救済を説くことに主眼が置かれていないということもあって、宗教的利他主義・社会貢献との関連での研究は少なかったが、藤本（2009）は、近代以降の神社・神職の社会事業や社会福祉事業、戦前期の内務官僚の社会政策に焦点をあて、近代から現在に至る「神道」と「福祉」との関連性を明らかにした。終戦直後の保育園の設立や、教誨師、保護司、民生委員をはじめとした社会福祉の担い手として、神職は社会に関わってきたことをさまざまな資料をもとに検証している。また、近年になって、鎮守の杜に象徴されるような「場」としての神道、そして神道文化にも関心が寄せられている（板井 2011）。

宗教的利他主義の研究では、教会参加とボランティア活動など利他的行為を関連づけて分析する。イギリスとアメリカの統計データ（British Social Attitudes, the Gallup Poll, and the British Household Panel Survey）を分析したギル（Gill 1999）は、教会参加とボランティア活動などの利他的行為との間には明らかな相関があると結論づけている。

宗教は人をより利他的にするのであろうか。もし、ネルソンとダインズ

写真4. ロンドンの街頭で募金活動をする救世軍（筆者撮影）

（Nelson and Dynes 1976）が指摘するように、宗教的世界構築（バーガー 1979）による象徴的宗教強化（デュルケム 1991）が利他的精神を発達させるならば、宗教者の利他主義は、その人の宗教的コミットメントと正の相関を持つはずである。つまりは、宗教を信じることによって、その信じた人の価値観、世界観がその宗教により築かれ、その宗教により説かれる利他主義もその信者の生き方を規定し、利他的精神を滋養するのであれば、利他主義を説く宗教を信じて深い関与がある人ほど、利他性が強いことになる。ヨーロッパ価値観調査の分析では、宗教的コミットメントが利他主義と正の相関をもつという結果が提示された（Gerard 1985）。その後、同様の分析結果が相次いでいる。近年では、日本人を対象とした調査でも宗教的コミットメントと利他主義の相関が指摘されている（三谷 2014）。

5. 宗教的利他主義の構造

宗教的環境は社会倫理の意識を育成し、人をより利他的にするのであろうか。それは如何にして、どのようなプロセスを経てなされるのか。筆者は、イギリスにおいて1997年1月から2000年春まで、宗教的利他主義のフィールドワークを行った。キリスト教系、仏教系２教団の信者の信仰生活に全面的に迫るために、彼らのコミュニティハウスで生活をともにしたり、食後の皿洗いをしたり、ロンドンの市街でホームレスへの給食活動にも参加した。次第に信者とのラポール（rapport：研究者と研究対象者の友好な関係・信頼関係）が形成され、彼らの信仰生活に対する筆者の理解が進んだ1998年から1999年にかけて60名の信者に対してインタビュー調査を実施した（Inaba 2000）。

インフォーマントの了解を得ての録音は一人一時間であるが、その前後のインフォーマルな会話もふくめて約200時間をインタビューのために費やした。インタビューに際してはライフヒストリー法により彼らの信仰生活を語ってもらい、最後に利他主義に関する質問をしたが、利他主義に関する質問の前に「信仰をもってよかったこと」、「自分が変わったこと」を問うと、自発的に利他主義について語る信者もいた。

ライフヒストリー法は、個人の人生の一時期、あるいは一生を対象としたインテンシブなインタビュー調査と分厚い記述の研究法であり、当事者の意識変容を捉えるのには格好の研究法である。他方、このような意識変容を語る際、インフォーマントは過去を現在において再構築しており、とくに利他主義に関しては現状とは異なる理想を語る場合も考えられるので、その客観性や信憑性に疑問を呈する向きもあろう。しかし、たとえインフォーマントの語りが理想であっても、それは信仰の影響の表出と考えられるので、それを解き明かすことは意義深い。ここでは、信仰生活における主体たる個人の意味付けを重視しているからである。

ここでは、結論の一部のみを紹介することにする。まず利他主義の意味内容であるが、神の意志に基づく倫理的義務として服従を要求する倫理的預言（ウェーバー 1992:76）を基盤としたキリスト教系の団体では、利他主義は善行を通しての神の栄光への奉仕を意味し、利他的行動の対象である他者との関係は神を通して理解される。一方、模範を通じて救済への道を示す模範的預言（ウェーバー 1992:76）に基づく仏教系の団体では、利他主義は他者への前向きな影響全般を意味すると同時に模範としての自己自身のケアも重要視される。

次に利他的行動の動機であるが、世俗的な価値観や幸福を否定する現世拒否的志向性をもつ千年王国運動であるキリスト教団は現実生活における幸福を重視しないために、合理的選択動機は希薄だが、倫理的預言に基づき、神の愛に通じる他者への共感や、自己犠牲と神による祝福という救済論に利他的行動が動機付けられる。一方、仏教系の団体の場合には困難な状況にある他者への共感において、自らも苦痛を感じる共感的苦痛動機が利他的行動の背後にある信者もいるが、この動機は信仰の深まりとともに消滅していく。また、個人のスピリチュアルな成長を重んじ、ニューエイジ的特徴をもつ仏教系の団体の場合には幸福感などの内的利益をもたらす合理的選択動機が強いが、そこには人との繋がりの世界観があり、救済論も利他的行動を動機付けていよう。

利他的精神の発達では、両教団ともに共同生活、友情関係、利他的特性を多分に持っているロールモデルとのコンタクトが決定的に重要と考えられる。

人間関係が希薄になった資本主義社会の巨大システムの中で、人は目に見えるつながり、実体感をともなった生活基盤を希求しており、対象教団における共同生活、友情関係、利他主義は、自分探しをしている信者に存在する自分と

いう確かなリアリティを獲得する機会を与えているのではないだろうか。それは、ロールモデルとの交流、他の信者との相互作用により、教団内でシェアされたある種のスピリチュアリティを獲得し、自己と他者、及び世の中の関係を再構築する意識変容の取り組みと言えよう。

6. ソーシャル・キャピタルとしての宗教

社会の様々な組織や集団の基盤にある「信頼」、「規範」「人と人との互酬性」が強く、しっかりしているところは、組織、集団として強い。人々の支え合い行為が活発化し、社会の様々な問題も改善される。そのような考え方に異論は少ないだろう。組織や集団にあるこの「信頼」、「規範」、「人と人との互酬性」がソーシャル・キャピタル（Social Capital、社会関係資本）と言われるものである。

1995年、阪神・淡路大震災が起こり、多くの日本人が、メディアの報道を通して、全国から駆けつけたボランティアの姿を目にした。その年の世界価値観調査で、日本では、人に対する信頼度が上がった。他者のために活動をしている人がいる、この事実が、「日本人も捨てたものではない」という気持ちを起こさせ、人に対する信頼度を押し上げたのだろう。また、ボランティアが盛んなところでは、人に対する信頼が高い。実際に、世界の30数ヶ国のデータにおいて、ボランティアなどの支え合いの活動、市民的積極参加と社会的信頼、人への信頼に強い相関関係が見られた（パットナム 2006）。そして、世界の各国がソーシャル・キャピタルに関心を示し、様々な社会政策を進めてきた。

欧米では、ソーシャル・キャピタルとしての宗教に対する関心が高い（Smidt ed. 2003, Furbey et al. 2006）。宗教が、人と人とのつながりを作りだし、コミュニティの基盤となる可能性がある。そして、そこに宗教的利他主義との関連が論じられる。

アメリカでは、ソーシャル・キャピタルとしての宗教を集合財とみなす立場が主流である。教会がソーシャル・キャピタルを創出するのに成功している理由として、ナン（Cnaan et al. 2002:255-278）は、教会参加が情緒的なニーズを満たす、聖職者が地域社会を良くしてメンバーをつなぎとめる努力をしている、社会的責任を説く宗教教育がある、移動性の高い社会で、地域社会も変化し、宗教組織だけが主なローカル地域社会の担い手となったなどをあげている。

ウスノー（Wuthnow 2002）は、橋渡し型（ブリッジ型）ソーシャル・キャピタルとしてステイタス・ブリッジ(status-bridging) を取り上げている。ステイタス・ブリッジは権力、影響力、富、名声に関係し、職を得たり、経済的に豊かになったり、教育・医療の支援を得られたりなどの便益があるつながりを生み出すと指摘する。教会のメンバーのほとんどが、政治的リーダーや経営者でもないが、教会に参加している人は、参加していない人よりも、そういった人たちを友人に持つ傾向がある。このようなことがステイタス・ブリッジ・ソーシャル・キャピタルである。教会活動に参加し、自分よりもより高い社会的ステイタスを持つ人と知り合う。そして、その人から様々なソーシャル・スキルを学ぶ。一方で、自分より経済的に、社会的に恵まれない人にも出会う。そこで、社会的責任を感じ、福祉活動にも参加するという可能性がある。つまり、教会参加から市民参加、政治参加へと参加者の意識と行動が広がっていくということである。さらに、ウスノーは、彼自身が実施した調査（Civic Involvement Survey：1500名のサンプル）のデータをもとに、教会が、その規模によらず、メンバー間につながりを作り出し、困った時に頼れる人も同じメンバーの人たちという環境を持つソーシャル・キャピタルであると論じている（Wuthnow 2004）。

イギリスでは、1980年代のサッチャー政権により排除社会が生み出された。1997年、トニー・ブレア率いるニューレーバー政権は、包摂社会を目指し、ソーシャル・キャピタルを政策的に導入した。市民の自発性にもとづくパートナーシップがより進められた。そして、信仰を基盤にしたチャリティ団体が貧困の撲滅や社会福祉の現場で幅広く活躍している（Furbey et.al 2006）。

筆者は、宗教的利他主義に関連する宗教の社会貢献を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会の様々な領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」（稲場・櫻井編 2009: 40）と定義している。ここには、ソーシャル・キャピタルとしての宗教、すなわち、宗教文化・空間・思想が与える安心、地域コミュニティにおける人と人とのつながりも含まれる。宗教が、人と人とのつながりを作りだし、コミュニティの基盤となる可能性も指摘されている（櫻井・濱田編 2012; 大谷・藤本編 2012）。

今、宗教団体、宗教者のボランティア活動、社会貢献活動は少しずつ増えてきている。そこでは、宗教が与える世界観と信仰というバックボーンが個々のボランティアの精神的支えになっている。さらには、世界観と信仰を共有するボランティア同士のつながりも重要な精神的支えである。それゆえ、宗教的世界観を共有したメンバーたちによって構成される活動は、宗教的世界観を共有しない人には、閉鎖的な感覚を与える可能性がある。いわゆる、結束型のソーシャル・キャピタルになる。

一方で、宗教団体の社会貢献活動、宗教者のボランティア活動が、社会的共感を呼び、宗教を超えて世の中に利他的な倫理観を伝えていく可能性も否定できない。橋渡し型のソーシャル・キャピタルの可能性である。宗教団体と宗教者による社会貢献活動は、活動の実質的な担い手としての機能に加えて、思いやりの精神を育てる公共的な場を提供する機能をも併せ持っていよう。

おわりに

東日本大震災の被災地では、寺社教会等の宗教施設は緊急避難所になり、300人以上が3ヶ月を過ごした寺院も多数ある。被災地での宗教者による活動の主な内容は、炊き出し、給水、物資仕分け・配送、泥上げ、重機を使っての瓦礫・廃材撤去、弔い、福島の子どもたちの保養プログラム、心のケアなどで、今も続いている。日頃から自死念慮者や経済的困窮者に寄り添う宗教者もいる。

写真5. 亘理町の家屋の泥かきをするキリスト教徒（筆者撮影）

宗教は、長い歴史において様々な苦に寄り添ってきた。

無宗教の国のように言われることがある日本であるが、実際には18万をこえる宗教法人が存在し、今、宗教者・宗教団体による宗教的利他主義の実践、社会貢献活動が行われている。近代社会が突き付けた自立した強い個人、自己責任、経済至上主義に対して、オルターナティブ、つまりは、別の価値観・生き方を提示する宗教的利他主義は、公共空間における社会的力としても、また、未来共生を考える上でも今後とも重要なテーマだ。

宗教的利他主義に関する研究が盛んになってきた。利他主義、社会貢献という言葉自体がそもそも価値判断を含んでいる。言うまでもなく、すべての研究は対象選定の段階から、何らかの価値判断が含まれている。ポジショニングを自覚しながら、そのことを引き受けていく覚悟が問われるのは、どの研究でも同じである。研究者が、客観性、中立性という言葉の陰に、研究対象を搾取していないか。研究者の利他主義、社会貢献も問われている。

参照文献

板井正斉
2011 『ささえあいの神道文化』弘文堂。

稲場圭信
2008 『思いやり格差が日本をダメにする――支え合う社会をつくる8つのアプローチ』NHK出版。
2011 『利他主義と宗教』弘文堂。
2012 「東日本大震災における宗教者と宗教研究者」『宗教研究』373: 9-52。

稲場圭信・櫻井義秀編
2009 『社会貢献する宗教』世界思想社。

ウェーバー、マックス
1992 『宗教社会学』武藤一雄・薗田宗人・薗田坦訳、創文社。

大谷栄一・藤本頼生編
2012 『地域社会をつくる宗教』明石書店。

櫻井義秀・濱田陽編
2012 『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店。

ソローキン、ピティリム
1977 『利他愛――善き隣人と聖者の研究』下程勇吉監訳、広池学園事業部。

デュルケム、エミール
1991 『宗教生活の原初形態（上）』古野清人訳、岩波文庫。

中里至正・松井洋編
1997 『異質な日本の若者たち――世界の中高生の思いやり意識』ブレーン出版。

パットナム、ロバート
2006 『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文他訳、柏書房。

バーガー、ピーター
1979 『聖なる天蓋―神聖世界の社会学』薗田稔訳、新曜社。

藤本頼生
2009 『神道と社会事業の近代史』弘文堂。

三谷はるよ
2014 「日本人の宗教性とボランティア行動――非教団所属者における拡散的宗教性の影響」『ソシオロジ』58(3): 3-18.

宮本常一
1972 「調査地被害――される側のさまざまな迷惑」『朝日講座・探検と冒険』7、朝日新聞社（宮本常一・安渓遊地『調査されるという迷惑――フィールドに出る前に　読んでおく本』みずのわ出版 、2008年に再録）。

Cnaan, Ram, Stephanie C. Boddie, Femida Handy, Gaynor Yancey, and Richard Schneider
2002 *The Invisible Caring Hand: American Congregations and the Provision of Welfare*. New York: New York University Press.

Furbey, Robert et.al
2006 *Faith as Social Capital*. London: Joseph Rowntree Foundation.

Gerard, David
1985 Values and Voluntary Work. Mark Abrams et al. (eds.), *Values and Social Change in Britain*, pp.201-226. London: The Macmillan Press.

Gill, Robin,
1999 *Churchgoing and Christian Ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Habito, Ruben and Keishin Inaba
2006 *The Practice of Altruism: Caring and Religion in Global Perspective*. Cambridge: Cambridge Scholars Press.

Inaba, Keishin
2000 *A Comparative Study of Altruism in the New Religious Movements: With Special Reference to the Jesus Army and the Friends of the Western Buddhist Order*, PhD thesis of King's College, University of London.

Nelson L. D. and Russell R. Dynes
1976 The Impact of Devotionalism and Attendance on Ordinary and Emergency Helping Behavior. *Journal for the Scientific Study of Religion* 15(1) : 47-59.

Smidt, Corwin
2003 *Religion as Social Capital: Producing the Common Good*. Baylor University Press.

Wuthnow, Robert
2002 Religious Involvement and Status-Bridging Social Capital. *Journal for the Scientific Study of Religion* 41(4): 669-684.
2004 *Saving America?* Princeton: Princeton University Press.